

現地職員からの報告 **ガザ**

「人が住めなくなる2020年のガザ」から

パレスチナ・ガザの現地職員、アリ(男性30代)とガディール(女性30代)が、日本ではほとんど報じられない最近のガザの様子と支援活動を報告します。

——最近のガザの生活はどうか？



ガディール (G) 現在、1日のうち電気があるのは4時間です。停電時間はまた増えています。1月には炊事用のプロパンガスが不足し、ガス店が20日間閉じていました。ガソリンはイスラエル側だけでなくエジプト側からも入るので入手は可能ですが、価格は20%くらい値上がりしています。トランプ大統領の和平提案が出てから、イスラエル側へ働きに出る労働者の許可も減らされました。また建築用のセメントなども入らなくなりました。物資不足はいつものこととはいえ、和平提案をパレスチナ人に飲ませようという圧力だと人々は感じています。



アリ (A) 2013年に国連は「2020年には水問題が深刻になり、ガザに人が住めなくなる」という有名な報告を出しました。とうとう2020年になりましたが、ガザの状況は全く改善しないまま、私たちはここで生活しています。海は汚染がひどく遊泳禁止。私たちは飲料水を買わないとなりません。その水が果たして安全なのかは誰にもわかりません。

——トランプ大統領の和平提案について、人々の様子はどうですか？

A 世論調査によれば、和平提案を94%の人々は拒否しています。特にガザは人口の7割以上が難民ですから、抗議のデモ行進やストライキなども起きています。また、秋には下火になっていたイスラエルとの境界付近でのデモ行進が再開され、タイヤを燃やすなども見られます。しかし、参加者の数は減っていると言われています。皆、生き残りに大変だからです。日々の生活に苦しんでいます。失業率は70%に上がりました。

ガザにも多くはありませんが、富裕層の人たちがいます。しかし、こうした人たちも生活が悪化していると聞きました。ガザは土地が限られ人口が増加しているため、土地を所有している人たちは潤っていましたが。しかしこの2年、土地を売りたいくても買える人がなくなりました。借金が払えず、刑事事件になっている人たちがたくさんいます。経済活動が停滞し市中の現金も不足しています。

20代30代が集まると「いつ国外に出る？どうやって脱出する？」というのが主な話題です。誰もがその話をします。



長下肢装具をつけて立てるようになった

2019年にも多くの人々が様々な機会をとらえてガザから出てきました。エジプト側に出るためには1人600ドルから1200ドルが必要ですが、そんな金額を出せないために、違法に海を越え、途中で命を落とした人たちがたくさんいます。昨年、専門性の高い医師が10人ほどガザから国外に流出したと話題になりました。

G 最近の心配は栄養失調が子どもたちだけでなく、大人にも増えていることです。妊娠中の女性の2割が栄養失調だと、保健分野の支援団体会議で話題になりました。一度は下がっていた妊産婦死亡率が上昇しているという危険な兆候も見えています。

私たちは2015年以來ずっと乳幼児の栄養支援をしてきましたが、できるだけ早い時期に介入することが重要なことが



手指麻痺の補助装具



栄養支援も継続



イブラヒム君も成長にあった義肢を得た



調理の職業訓練を受け、飲食店でインターンをする青年

分かっています。今後は、妊娠中の母親たちへの支援がキーになってくるでしょう。栄養状態が悪いままで生まれた子どもは、その後の成長も阻害されるからです。

——最近の支援活動について、少し報告してください。

G 障がいを負った人たちに、それぞれにあった補助装具を配っています。下肢を切断したり下半身に麻痺のあるなどの人たちには、義肢や車いす、下半身を支える長下肢装具(KAFO)などを支援しました。その結果、自分で立てるようになったり、杖がなくても歩けるようになっていきます。また電動スクーターや自転車を支援することで、一人で通学、通院したり買い物に行ったりするなど、活動範囲が格段に広がっている人たちが増えてきました。寝たきりだった脳性麻痺の子どもや大人も、背もたれの高い車いすを使うことで座位をとれるようになっていきます。専門の歩行靴は左右のバランスが取れない人に最適です。手の麻痺がある人たちへの補助装具は、採寸して一人一人に合わせて作っています。そのほか、脊髄損傷の人たちへのおむつやりハビリパンツの提供、アラブ式のトイレを楽に使えるようにする補助いすなども大変好評です。また吸入器も提供しています(表紙写真)。

A 380人以上には医療関係者たちと一緒に補助装具を配っています。本人や家族からは、「どこからの支援もなくなっている中で、自分たちのことを見捨てずに支援していること



スクーターの使い方を学ぶ



2014年の戦争で片足を失ったハッサンさんは義肢を得て自立できるようになった



刺繍の職業訓練に参加したハッサンさん。片足なので座り仕事でないと難しい

に感謝してます」とよく聞きます。また「障がい者が生活するためのニーズを理解した支援が嬉しい」とも言ってもらえます。スクーターを支援した一人、以前に紹介した片足を失ってもお菓子作りをしているアスマさんからは、「一人で市場に買い物に行ったのは2014年の戦争以来です。夫や家族を煩わせず、これからはお菓子の注文も取りやすくなるし、材料も自分で選べます」と聞きました。ガザでは電動スクーターはあまり売っておらず高価ですが、障がい者の自立につながっているのです。

G 2014年の戦争で片足を失ったハッサンさん(写真下)は、職業訓練で刺繍を習い今はインターンとして商店で働いています。また新しい義肢を支援したので杖なしでも歩けるようになりました。「自分は社会の一員だとうまく感じられるようになった。友達もたくさんできて、Facebookもやっています」と言います。

障がいのある人たちや栄養に問題のある子どもたちなど、助けを求めている人はむしろ増えているのに、支援が減っている中で、私たちの支援が人々の人生を良い方向に変えていることを日本の皆さんにぜひ知っていただきたいです。支援を受けている人たちに代わって皆さんに感謝を申し上げます。